

アビドス高校一年 雨之こよみです！

よわよわよわ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

春爛漫——少なくとも、桜よりも舞い散っている砂がなければの話だが。

そんな限界集落一直線の高校、アビドス高校に入学することになった雨之は一癖も二癖もある人物と関わることになる。

「——これって、学園系物語みたい！」

## 目次

楽しい楽しい入学式	1
えっ!?!私の高校、(砂が)多過ぎ……?!	5
学校帰りって青春の花形だと思うんだ。	10
友達が天才だった展開の対処法	17
食への価値観は合わないことが多い	21
休日の予定を決めるのは一週間前にするといひ。	27
暇を潰せるほどアビドスに娯楽は無い。	31
夏休み—— キャンプはできない地域	34
物語の始まりは	41

## 楽しい楽しい入学式

——清々しい快晴

世間では桜並木が満開を過ぎた時期に当たる今日このごろ、私はこれから始まる青春に想いを馳せた。

……………答だった。

校内との区切りである校門を慌ただしく一輪車が通っていたからである。……勿論、普通に考えれば何かを運び出しているのかと考えるだろう。もしかすれば、新たに生徒となる私達を歓迎する為に……なんて

確かに間違えていない。が、しかし問題は運んでいるものだった。

「“これ” さえなければ……私の青春も、もつと楽しめたんだろうなあ……………」

こんもりと積もり積もった肌色の山——凡そ十年あまり続く砂嵐によって私の住んでいるアビドス全体に降り掛かる天災の象徴——  
——砂だ。

私がこうして立っているもつともつと前のアビドスはそれはそれは巨大な街だったという。今や2大巨頭のように言われているゲヘナやトリニティといった高校をゆうに越える敷地や人口だったとか。

それが今では生徒数2桁が精々の高校にまで成り下がってしまい、まあなんとも寂しい話だ。

「……………はあ。なんだかなあ……………」

（青春したいなあ。勉強して、部活も頑張つて、放課後に友達とスイーツ食べてみたりなんてしてみたいなあ。）

「……………」 スタスタスタ

後ろから辛気臭そうな横顔の子が私の後ろから通り掛かる。

「……………」

(……………これって、もしかして同級生的なサムシング!?)

なにか新しい青春の予感が……! 来ました~! と言わんばかりに思考がこの無駄に綺麗な青空のように晴れ渡る。私は早速このショートヘアの同級生カッコカカリに話しかけることを試みるのだった。

「るんるん☒——おっと、キミも新入生?」

「……………何か用?」

「いやいや、大事な用は無いけどね。折角高校一年生の一日目なのになんでそんなに辛気臭そうな顔しちやってるのかわかる? って——」

「悪い?」

(やば~! ちよつとバッドコミュニケーション?)

困惑したような応答からより冷たさを色濃く残した彼女であったが、私は頭の中にある会話デツキを探る。

「……………ほん。ごめんね、ちよつと同級生を見て興奮しちやつた——

—ああつと! そういう意味じゃないよ! はは、こうして普通の学校生活を送れることに対しての嬉しさっていうか……………」

(ヤバい。めつちや機嫌悪そう。……………許して~!)

目つきが道端の空き缶を見るような感じになってきた辺りで彼女は小さくため息をついた。こ、こんな筈では……………

「……………ならもういい?」

「ああ、うん。ごめんね。」

立ち去る寸前に誰だったのか分からなかったことを思い出した。恐らくは一年生じゃないか……………と思うけど。

「あ! ちよつと待って!」

「……………まだ何か?」

「——名前! 名前はなんていうの?」

「はあ……………ナンパか何かですか?」

「ええ~!? そんなこと言う!? 酷いなあ……………」

「——たかなし小鳥遊ホシノ」

「タカナシホシノ……ん、オツケー！ホシノちゃんね！」

いきなり下の名前で呼んだからかホシノちゃんはため息を吐いてその場から立ち去ってしまった。

(……ははあ……)

——さては彼女、ツンデレだな？

私は”経験則”を元に彼女がどんな人なのかを考えていた。真面目そうな雰囲気やあまり人と群れることを好まない性格らしい彼女は所謂”ツンデレ”という奴なのだろう。

(ツンツンした態度で、好きな相手だけデレデレ……クツクツク……) いつの日か蕩けそうな声でこよみちゃくんって呼ばれるように……なんちゃってね。

「仲良くなりたいし……やるぞー！」

く教室く

「あつ！ホシノちゃん！一緒のクラスだったんだ！」

教室に到着して、まずはちよつとしたジャブ程度の挨拶だ。今気付いたように挨拶をしつつホシノちゃんの前の席へ陣取った。

……それにしてもホシノちゃん。すつごい顔してるけど大丈夫？なんか目つきが更に悪いし口も半開きにしていかにも「メンドクセー!!!」って感じになってるけど。

「……クラスは一つしか無いから当然でしょ。」

席は五十音順に並べられてあるが、”あ”の私と”た”のホシノちゃんは前後であった。あくたまで二人しかいないのが過疎度合いを表しているだろう。

というか、クラス合計で2桁いかない。この学校の7割は上級生だ。

「まあまあそんなこと言わずにさ。これから1年……じゃなかった。3年間よろしくね！」

また例の顔をしているホシノちゃんの相手をそこそこに私は準備

を始める。まだまだやることはあるんですよ！

そんなわけで、交友を深めるべくスマホを片手に再びホシノちゃん  
に向き直った。

「ホシノちゃん、モモトーク交換しようよ！」

「●〓●」

「なんとなく予想してたけどそんなに嫌なの……？」

「……そうじゃなくて、早過ぎるの展開が。普通会って数分の人と交  
換する？」

「うーん——クラスメイトだから？」

「……………」

いやいや、そんなコイツ話通じねー！みたいな顔しないで？！

クラスメイトと交換するのは普通でしょ？！

「……分かったから。ほら。」

「くくくえへっ！やった！」

ホシノちゃんと交換できたこの流れに乗って何人かとモモトーク  
を交換した所で、ちようど体育館へと移動する時間となった。

えっ!?!私の高校、(砂が)多過ぎ……………?

……………

「……………」

ざくり、ざくり。

あはは、あたしや農家だよ。だって初登校の当日にシャベル持って砂掻き出してるもん。

え?なんでこんなことをしてるのか……………って?

そりやあ、生徒会長様直々に頼まれたんだもん……………断るのは無理だよね。あ、ホシノちゃんも含めてクラス全員がシャベル持って砂を掻き出してるよ。凄いね!団結力もバツチリ!体育祭は私のクラスが勝ったな!

「……………そんな訳あるかあ……………」

(体育祭ってどうやるんだろ?クラス内でチーム分けでもするのかなあ?)

なんて思いながら、どうしてこうなったかを思い浮かべた。

———あれは2時間前。

入学式を終えた私達は再び砂っぽい教室へと戻った。入学式も終わったことだし、レクリエーションでもあるのかな?なんて思っているとちやちやまるみたいな顔をした生徒会長が教室へと入ってきた。

なにごとなんだと皆が思ったと思う。皆の視線が向けられた生徒会長が開口一番に放った言葉は「ごめんなさい」だった。

どうやらうちの高校は毎日毎日砂埃が大量に入ってきて来るため、現状維持すらいっぱいっぽいらしい。昨日のうちに校内の細かい砂埃は頑張って処理したみたいらしいが、昨日の今日で砂が大量に積もってしまい大変なことになっているという。

ここで私はあの一輪車を思い出した。ああ、なるほど。と名探偵のようなヒラメキと共にもしやとこれから言われる言葉を予想してしまふ———と、いうよりは最早クラス全員がなんとなく気付いていた。

「砂を掻き出すのを手伝ってほしい!」



パンと小気味よい音を鳴らして生徒会長の掌と掌が合わさる。今度は……——（◇）（◇）こんな感じの顔をしてお願いっ！ってやってきた。

私達は三者三様の表情で迎えるも、なんとなく断りにくい雰囲気が出来てしまったことで今度は誰が発言するのかわかという押し付け合いが始まった。どうしようかと迷っている間にホシノちゃんが声を上げた。

「分かりました。手伝います。」

「あつ！ホント!?ありがとうございます！」

迷わず言葉をかけたホシノちゃんに続けて、私も。と声が続々と上がっていく。最終的に全員が手伝うことになって……こうして砂をシャベルで集めることになったんだ。

「雨之さん、そっちは終わりました？」

「あ、もう殆ど集めたから後は運ぶだけです。」

砂嵐によって舞い上げられた非常に細かな砂は風に乗ってここまですべて飛んできてしまう。ここも住宅街の筈だけど、四方が砂に囲まれてきたということらしい。

……まあ、つまるところ人の手入れが無くなったことで住宅地ですら砂が飛んできているということなんだけど。

まあ過疎だね。人がいなくなった廃村に家が植物で生い茂るように、ここは砂によって埋もれ、打ち付ける砂嵐によって風化してロボロになっただけ。

こんな環境じゃ植物もあまり育てることは難しいし、アビドスで自給自足なんてやっていけない。そんなんだからヘルメット団とかが稀に暴れまわってるし。

「これはどこに運んだら良いんですか？」

「学校の外に砂捨て場があるから、そこに捨てに行かないと駄目なんだ。」

上級生の一人がそう答えた。住宅街の中にコンクリート造りの小

さな工場があつたらしく、そこを活用してアビドス高校に溜まる砂を捨てているんだとか。壁が高く多少の風では砂が舞わないらしい。

「じゃあ台車が帰ってくるまで待とうか。」

「はいー!」

と、いった感じで先に出た一輪車を待つことになった。当然、この膨大な量だと人力よりも車などの運ぶものが欲しいけど……まあ、期待できないよね……

「……ねえ、ホシノちゃん。この後ヒマ?」

「……………何か?」

「ええと、放課後町探検でも……なんちゃって。」

私がそう提案するとホシノちゃんは一息——はあ。と息を吐いた。

「まともなお店、あると思う?」

至極まともな返答だった。もはやこの辺りにまともな娯楽施設はない。アビドス高校がある方向とは逆のもつとゲヘナトリニティに近い場所ならば。いや、両校の地区内にいけばもつとあるだろう。

去年までここに所属していたアビドス生たちも皆他の地区へ行ってしまったみたいだし、ますますアビドスでの生活が困難になっていく。

逆に言えばここにまだいるお店はフットワークが軽くない店ばかりだ。あちらの方へ近ければ栄えているが、帰りに何かを食べるなんてことはそうそうできない。

でもそれじゃ楽しくないでしょ?」

「分かってる。でも新たに発見しようよ。地元愛をさ。」

「(・□・)」

やっぱりホシノちゃんはすごい顔をするなあ……!」

「……………嫌なの?」

「——そりゃあ、まあ。」

「あらまあ、ホシノちゃんは地元への愛がないねえ。」

無いわけではない。というホシノちゃんに対してそう煽ってみる

と非常に大きいため息をついた直後に呆れたような顔を向けた。うーん、これはバッドなコミュニケーションだ。修正しないと……

打開する為、私と彼女の間を埋めるために原点に戻ることにした。まずは会話デツキの構築からだ。

「じゃあこうするのはどう？」

確かに初対面で食べ歩きは難しいかもしれない。そしてあまり会話デツキに富まれない私では、初回からこれに漕ぎ着けると思ったのが間違いだろう。

(ここはテンプレの使い時……つてね！)

「一緒に帰るとかじゃ駄目？」

一緒に帰ってもう友達でしょ大作戦——

こういうシチュエーションはあるだろう。下校を共にし、より互いを知るのは常套手段といえる。そして私は更に会話デツキすらもテンプレを用意しているのだ！

テンプレがテンプレたる理由は簡単だ。手軽に強く、効果が見込めるからである。ここでは「キヴオトスにたちかけし」を活用してホシノちゃんとの仲を……ふふふ。

さて、そんな策を巡らせていると十数秒ほど経った辺りでホシノちゃんが「それくらいなら……」と答えた。ふふふ、実はこれも作戦の内の一つなんだよね。

何かを断った後つて断りにくい感じになるらしくて、頼み事をする  
と高確率で受け入れられるという研究結果もあるらしい。これも How to make friends という本に記載されていた手法だ。

非常に面倒そうにしていながらも、最終的にホシノちゃんは帰るく  
らいなら……とOKを出していた。ふふふ、驚いたかな？これが私の交渉術だ。

そう話している内に一輪車が来たので、それに砂を積み込むと先輩  
達があとは任せて！ありがとう！と礼を言った。

僅かながらも150mのジューズを全員に渡してくれたので、そ

のお礼を言った所で今日一日がやっと終わった。

学校帰りって青春の花形だと思うんだ。

「さくあホシノちゃん！早く早く！」

校門前にて私は彼女を急かした。それを受けて鬱陶しそうな顔をしている彼女は随分と悠長に歩いてくると私はかねてより構えていた言葉を投げかけた。

「ホシノちゃんの家ってどっち方向なの？」

「あっちの方。」

——そう言つて校門前の道路の右手方面を指差した。

（——へえ、もしかして……）

「駅の近くなの？」

「君の好きな青春だらけのそこだよ。」

アビドス中央線——今、アビドスで残っている僅かな路線の駅だ。ここからトリニテイとゲヘナに向かう路線や郊外へと向かう路線などが残っている。

アビドス中央駅はアビドスで最も都会だと言えるだろう。確かに規模は小さいかもしれないが、少なくとも飲食ができるからだ。

それ以外の場所ではそういったサービスを受けることは中々できない。アビドスも田舎になったものだねえ……

「私はあっちの住宅街の奥の方かな。」

——ホシノちゃんとは反対の方角へ人差し指をピツと指した。

アビドス中央駅から離れると住宅街になっているけど、アビドス高校は住宅街の真ん中より少し奥あたりに位置している。ちなみにこの広大な住宅街の約6割以上が空き家なんだとか。

私は高校よりも更に更に奥の場所にある家で生活している。私の家の周囲はボロそうな……とかぶつちやけ半壊してるような建物ばかりだけど、そんな中ではそこそこ綺麗な家じゃなからうかと思っている。

「あっちの方って……もしかして外周部？」

「うん。だから砂嵐の時とか大変でさく……」

「そう、なんだ。」

「特にここ最近なんか強くて強くて家が埋まっちゃうかと思っただよ。」  
「……………もうちよつとこつちの方には住まないの?」

「あー……………まあ、考えたんだけど難しくて……………でも、いずれ引越そうかなって思ってるかな。」

「……………ふーん。」

ちよつとだけピリツとした雰囲気になりかけている。

「ま、”話題が話題だし仕方ないよね?”って思ってたらホシノちゃんはそのまま続けた。」

「近くに飲食店とかスーパーがあるの?」

「いや、無いかな。結構遠い場所に買い出し行かないといけないから面倒なんだよね。」

「……………だろうね。」

「なんだ? 居住地マウントかな?」

——実際不便には変わりないのだから何も言えないけど、それはそれとしてちよつとだけ抗議を行う。

すると、彼女は申し訳そうな顔をした。

「……………まあ、実際不便には変わりないけどね。配達範囲外だから荷物の受け取りもこの辺まで来ないと受け取れないし。」

10歩ほど無言になって歩いた後、そう呟いた。会話は続かなかつた。

「ああ、そうだ。ホシノちゃんって本はよく読む?」

「……………いや、そんなに読まないけど。」

「ふふん、だと思っただよ。そういうホシノちゃんの為に何かオススメの本を貸そうかなって思ってたさ。」

「遠慮しておく——」

「——そう言わずにさ。コメディとか推理系とか好きなジャンルってあったりする?」

「……………凶鑑、とか。」

「凶鑑?」

「そう。実は海の生き物を見るのが好き。」

「そうなんだ……私はどちらかと言えば鳥とか蛇が好きかな。……そうか、海の生き物図鑑かあ。持ってないなあ……」

意外な趣味のホシノちゃんを知れた所で閑静な住宅街を抜け、ある程度の人の喧騒を感じられる場所に付いた。遠くから踏切の警笛か、規則正しく甲高い音が鳴っている。

これが、今最もアビドスで栄えているエリアだ。

「さてさて、ホシノちゃんはどの辺り？」

「そこだよ。」

ホシノちゃんがピツと指を指した先には小鳥遊という文字は一見見当たらない。何故ならば、それはマンションであったからだ。

「WOW……すごい大きいマンションだ……」

「……兎も角、そういう訳だからここでさよなら。」

「うん。ありがとうね！」

バイバイと手を振ると、なんだか気恥ずかしそうに少し手を振ってドアの向こうへと消えていった。少し後に私はここから立ち去った。

——さて

私は”やらなければいけないこと”がある。

それはずばり——

(——反省会……だよねえ。)

なんとというか、ホシノちゃんは少し困っていたように思える。つまるところ、私がどうしてここまでグイグイ突っ込んでくるのかが分からないのだろう。もしくは、それを好ましく思わなかったか。

でも、ほんの少しでも不快にさせてしまったことは問題だ。このままだと関係が悪くなるかもしれない。

(次はもうちょっと……控えめにアプローチを……)

なんて考えを巡らせながら私は帰る途中でスーパーと書店に寄れるルートへと向かうのだった。

凡そ2時間後——やつと家へと到着した。

周囲には砂しかなく、人がいるなんて思えない”砂漠”があった。しかも暗いせいでもう少し踏み込めば闇に飲まれてしまうだろう。勿論、周囲に外灯なんてなく、間違ひなくここは死んだ地域であることを現している。私は慣れたようにある機械を起動した。

”その”機械はとても低く唸り声を上げた。2、3度大きく唸り声を上げた後、断続的に震動とピストンによる回転が始まる。しばらく待てば家にある唯一の光源が点灯する。

プレハブ小屋……とは少し違うけども似たような四角い箱の家がお出迎えだ。

「ただいま〜」

ドアを開けて家の中へと入る——その前に羽箒で服に付いた砂を極力落とす。ある程度落とした後にやっと入るのだ。

学生服を脱いで別の服へと着替えをする。まだまだやるべきことがあるのだ。と、外へと移動する。

砂が入り込まないようにレンガで固めてある一角に薪を投げ込み、壁にあるクランクを回すと歯車が回転して横にあるドラム缶が火元の真上に設置される。向かいにある水瓶を設置しているキッチンへと向かい桶に水を組んで6回ほどドラム缶へと入れてやると今度はライターで火起こしを行う。

火の様子を見ながら服を脱ぎ捨てて火が大きくなった所で横から入浴を行う——前に後ろのタイル張りの所へと移動した。そこで手桶でぬるま湯を組んで頭から被る。髪が湿ったかなあと思った頃に固形石鹸を砕いたものを上に塗布して泡立てる。

ある程度洗った所でもう一度手桶のお湯で洗い流す。この石鹸はリンス入りという超優れものなんだよね。

ナイロンたわしを用意してお湯へと入れた後、今度は固形のボディソープを使用した。十分に泡立った頃に全身を洗っていく。

「ふんふんふん〜♪」

入念に洗った後、手桶に入れていたお湯で泡を洗い流す。後にナイロンたわしもよく洗って干せばやっと湯を楽しむことができるのだ。(今日はハーブも入れちゃったりして〜)



入浴をしてる時が私の中で一番生を実感するっていうか、とっても安心するんだよね。

パパパッと千切った薬草と同時に湯に浸かる。

「嗚呼……良きかな良きかな……」

10分ほど浸かると、今度は湯が熱くなりすぎるのでドラム缶から飛び出る。そして予め用意していたタオルで全身を拭いた後に今度はクランクを逆方向へと回すと先程ドラム缶があった場所にすっぽり収まった。中にある水が冷やされた後にクランクを更に回すと裏庭にある貯水槽へと水が流れていき貯められる仕組みとなっている。そこから栽培している野菜の水やりとかに使用するのが。

さて、先程ドラム缶があった場所に大型の金網を設置する。なんとかするだけでキッチンの完成だ。そこへ買い置きしていた袋麺や今日買った野菜や肉を用意する。

「さてと、今日は豪華にいけますか。」

基本的に私は一度炊けばすぐに食べないといけない米よりも、しっかりと保存しておけばちよつと温めて美味しく食べること出来るパンばかり食べてしまうのだが、今日という日にはご飯を食べる理由に十分だ。

風呂に入る前に浸けておいた飯盒を乗せて、続けて肉の下処理を行う。

ちなみにだが、風呂場と炊事場は”本当は”別なのだが、燃料が勿体無かったり、2回も火起こしするのが面倒だということ使わなくなっている。しかし、ここは風呂場なのであくまで火を使う作業以外は炊事場で行っている。どこかでIHにしたいと思うけども、電力が問題だよねえ……

ちなみに電力供給が無いので冷蔵庫はない。今はアビドス高校周辺部までしか供給されていないんじゃないかな。……というよりは電柱が折れたり倒れたりしたままっという物理的な供給できない理由なんだけどね。

こうしてガソリンやオイルを使って生活に必要な電力を賄って生

活してる。ちなみに太陽光発電システムは止めておいたほうがいいかな。すぐにパネルが埋もれるかボロボロになるんだよね。

さてさて、今日のメニューは鶏肉のチリソース和えとサラダだ。飯盒の横に鍋をセットしてるから、まずはそこに鶏ササミと塩を茹でる。最近は鶏肉が安いので”買い”だ。

「ん〜……」

茹で上がった鶏ササミを岩塩、バジル、白胡椒で味を整えミニトマトと野菜を乱切りにして皿に載せていく。その上からオリブオイル（エクストラヴァージンオイル）を掛けてサラダが出来上がる。

本当ならゆで卵なんかもいい感じなんだけど……保存場所がね……（・ω・）

でも、今日は特別な日なので買っちゃったんだ。4個入の小さいやつをね。

「さてさて……この万能調味料と鶏ガラでスープを作ろうか。」

先程のササミを茹でた鍋に2つの調味料を入れて味を整える。玉ねぎ半分をざく切りにして入れて10分ほど待てば手軽なスープの完成だ。出来上がりの直前に黒胡椒と胡麻を入れて頂こう。ついでに溶き卵も少し入れてと……

スープの横に小さい金属コップに卵を1つ入れてゆで卵も作っておこう。

そして、もうそろそろご飯も炊きあがる頃だ。

「ん——？」

炊きあがりを確認した直後、スマホから通知が来たようだ。

「——ホシノちゃんだ！」

『今日はごめん。』

『恋愛物とかも興味あるから。』

『機会があつたらオススメの教えてね。』

「……ふふふ……w」

ええと、ホシノちゃんはどんな顔をして送ったのだろうか？

『当然だよ！もつと色んな本もいっぱいオススメするよ！』と私はモ

モトークに送信した。温かいご飯を食べながら何だか頬の弛みが収まらなかった。

ちなみに恋愛云々は送信取り消ししていたのは別の話。

——まあ、何にせよ私の美しい学園生活は始まったばかりであり、ここから始まるドタバタコメディやセンチメンタルなストーリーが幾つも待っているのだろう。

## 友達が天才だった展開の対処法

春爛漫がギリギリ続く頃……

世には爆破音が絶えなかった。”キヴォトス学園生活あるある”

——訓練のお時間だ。伊達に銃火器を持ち歩いておらず、キチンと使用、手入れ等の技術を養うための時間でありキヴォトスを生きる為では疎かにしてはいけないものだ。

さて、”外”から輸入された本によると高校の授業では銃を取り扱わないらしい。というより、極少数ではあるが銃を禁止している国もあるらしい。

私も一キヴォトス人としてそれなりには銃の扱いは慣れているとは思うけども……

「すっごい……」

ショットガン——近距離で優れた制圧力を持つあの武器だ。威力もかなり高く、他の高威力な銃火器よりも比較的軽いという特徴もある。

それをホシノちゃんは巧みに操りの粉碎していく。あんなちっちゃい身体でどうやって暴れ馬みたいな反動を受け止めているのか

「そこまでー」

終了の号令が発せられると辺りはワツと歓声に溢れた。あまりにも次元の違う…それこそ上級生とさえも張り合えるのではないかと思えるくらいだった。

(ええ〜……あの後に私が……?)

今回の訓練は的当てで高得点を狙うという簡単なものだが、まあ上手く行かないだろう。そもそも私はこういうことは苦手なのだ。

「……ん？」

そうして考えているとホシノちゃんがこつちを見ている。……なんかドヤ顔だ。こんな感じの（……）フンスって顔になる

(く……せめて的を当てるくらいは……！)

~~~~~

「……よくがんばったね」

「……ありがとうございます。」

結果は……ダメダメ——とまではいかないと思いたい。

(銃なんて無くても生きていけるんだよ……この世界は。)

「お疲れ様。」

声をかけてくれたのはホシノちゃんだった。なんだか気を使わせてるみたいで申し訳ない。

「……あはは、全然駄目でしょ？」

「ダメダメだけど……こういうのは慣れてっていうし、誰だって練習すれば——」

(ちがう……違うんだよホシノちゃん……！)

なんとというか、銃の扱いに慣れてる方がおかしいんだと思うんだよね。キヴォトスの外じゃ銃弾のゴミ箱が無いって言われてるくらいだし！

だからそんなに励まさないで！お願い！銃の扱いは青春には関係ないんだ……！

……とは思うけども、私はキヴォトスに住んでいることは事実だし、銃と距離を置いた生活はしているものの携行してるし最低限のメンテナンスは行ってる。

学校を卒業後は外で過ごすとしても、この3年間は銃と無縁にはなれないし……

実はもしかして、今すぐに銃から離れるメリットってあまり無いのかも……？

「うん……今度教えてほしいな……」

衝撃の事実気づいた私はあの結果に落ち込まざるを得なかった。

そんな落ち込む様子を見かねてか、ホシノちゃんは個人練習をしたらどうかと言った。

「放課後——練習——」

それってなんか……とつても青春って二オイを感じる——！  
「よしーやろー！」

そう息巻く私をホシノちゃんはなんだか微妙そうな顔で眺めていた。

---

【side 小鳥遊】

<放課後 体育館>

(……………)

3枚ほどの紙を見て、私は思わず頭を抱えた。

その紙にはまるでチーズのように全体に穴が空いており、場所によつては半円やイチヨウのような形の穴も確認できる。……そちら方面には詳しくはないが、現代アートとしてならば”メイ”作と呼ばれるかもしれない。

そして、私の前にはバツが悪そうな顔の彼女がいた。

——雨之こよみ。同級生クラスメイトで友人でもある子だけでも……なんと  
いうか色々厄介な子だと言えるだろう。

彼女が手にしているのは回リボル転式拳銃バーで蛇の名前が付けられているシリーズだけど、あまり彼女の手には馴染んでいないみたいだ。

そもそも、一般的に自動小銃アサルトライフルや機関銃マシンガンといった割と大型の銃器が殆どの人にとって親しみのあるものなのだ。威力もあり、銃弾の装填もマガジンの為携行しやすくリロードも素早く行える利点がある。一方でベルトリンクのものもあるが、携帯に難がありつつも大幅に装弾数を増やすことができるだろう。

だが一方で拳銃ハンドガンと呼ばれる類のものが廃れているという訳でもなく、直接戦闘を目的としない後方支援や裏方の最低限の護身用であったり、大経口のハンドガンや自動拳銃といった部類は取り回しの良さから採用されているというケースもある。が——

やはりリボルバーはあまり好まれていないイメージだ。戦闘においてリロードという行為はかなり隙を晒す上に、回転式拳銃は工程が

多い。そして弾数も6〜8発と少ないのでそれならば通常の拳銃を使用すると考えるのは普通のことだろう。

それに確か、ハンドガンを好んで使用するのは変人しかいないというジンクスも聞いたことがあるけど……

（——まあ、いいか。）

それよりも一応特訓を提案した身としては何かアドバイスをしなければならぬ。

ハンドガンというものは比較的発砲した際の反動は少ない上に、彼女は反動によってブレが生じている訳ではないと感じた。むしろ……打つ前にブレてるというべきか……

（これだったら最初は打つときの姿勢から教えたほうがいいかな。）

「こよみちゃん、まずは——」

食への価値観は合わないことが多い

「——時にホシノちゃん」

私は神妙な顔をして聞いた。今、眼鏡をかけていればきつとかの名探偵のようにキラリと白く光っている筈だ。……少なくとも私の心の中ではだけでも。

「……何？」

”また”何か面倒なことを言ってきたぞ。と言わんばかりの反応だけど、構わず私は続けた。

「何故昼食はそのチョイスなの？」

ホシノちゃんの手に持っているパンに目線を当て、何故——そうなのかを聞いてみた。あれは駅前にあるコンビニで売られているらしく、緑のロゴが入っている。

いや、それよりもとても由々しき事態なのだ。ホシノちゃんは少しだけ考え込んだ後に理由——いや”弁明”を述べた。

「安いし……それなりに美味しいから結構気に入ってるからだけ。」

「（ハ、ハ）」「駄目だよそんな価値観じゃダメ。」

——余りにも”浅い”考えのホシノちゃんには少しばかり価値観を変えて貰う必要があるようだ。

「いい？食事はね、最大の娯楽でもあり生きる為に必要なことなの。」

「それをたったの130円かそこらのパンで誤魔化すのは食に対する冒瀆と言ってもいいよ。」

「第一、ホシノちゃんはちっちゃいからもう少し食べなきゃダメ。カレシが出来たらどうするの？」

「ツナマヨ卵サンドは美味しそうだけど、やっぱり一品を揃えて弁当にした方が交換だつてできるし……って聞いている？」

いっぺんに指摘したせいか彼女は眠そうな顔をしている。なんと  
いうか……ホシノちゃんってそういうところあるんだよね。真面目なのに面倒くさがりというか……

なんて思っているとホシノちゃんは一つため息を吐いた後にボソリと一つ呟いた。



「はあ……こよみちゃん家はエンゲル指数が高そうだね。」

「ぬ……これでも家計は火の車なんてなったことはないんですケド？」

私の生活力を舐めないでほしい。もしも家が砂嵐に吹っ飛ばされても生活できちやうくらいなんだからね！

「そこまで節約して食のQOLを高めるつもりはないし、近場で美味しいものを食べることもできるから私はいいかな。」

「ホシノちゃん効率厨って言われない？人間は効率だけじゃ成り立たないよ。」

「学生にとつて時短とコスパほど響く言葉はないと思うけどね。」

「ぬぐぐ……た、確かに……いやでも——」

「ていうかさ、こよみちゃんはただ弁当を交換したいだけじゃないの？」

「……まあ、それもあるけど。」

というより実際はそれしか無いけどね……でも弁当交換するのって青春って感じでしょ？なんなら外ではお母さんが作ってくれるらしくて、それを見せ合ってどちらが豪華なのかをバトルするのだから。まあ、私にはいないから出来ないんだけどね。

「……結構古くない？今どきの漫画でも毎日弁当なんて中々見ないと思うけど。」

(……確かに！)

よく考えてみれば、弁当食べるシーンなんてちょっと古い絵柄の漫画でしか表現されてない気がする。

い、いやでも流行りは循環するっていうし……！温故知新って奴だよー！

「でも、やっぱり定番といえど定番でしょ？じゃあやるしかないでしょー！」

「……それ、私がやる意味は？」

「楽しいからじゃダメ？」

「ダメ」

「OTZ」

「——ハッ！もうこの際そのパン一口とおかず一品を交換じやダメ!?」

「ダメ」

「( ; ω ; )」

「うわあん！ホシノちゃんは冷徹すぎるよ！」

「ダメなものはダメ。そこまでやりたいなら自分で弁当を2つ作って交換をしたら……?」

「——それは悲しすぎるでしょ!？」

余りにも酷い提案をしながらホシノちゃんは最後の一口を終えたのだった。

<放課後>

腰に下げているホルスターから銃を抜き、ゆっくりと構える。

これを行った後、5分間構えた状態にする。その後銃を戻すという訓練を今は行っている。

これで5日目になるけれども初日以外は撃たして貰えなかった。横で見ているホシノちゃん曰く『姿勢からダメダメ』らしい。

という訳で筋トレと構える練習が今やっているトレーニングらしいけども……滅茶苦茶辛いんだよね。

勿論最初は構える時間は一分だったんだけど、その時は余裕だと思ってた。でも、クールダウンに筋トレ2セットを熟した後にもう一度これをやるとすぐに身体中から汗が出てきた。その後、銃の重さが嫌になった頃にはこれがとてもキツイ修行だと理解してしまった。

次の日、筋肉痛が二の腕から掌まで襲って来ていることをホシノちゃんに伝えた所、あることが分かった。ホシノちゃんはスパルタだったんだ。あの言葉はしっかりと覚えている——『足は痛くないんでしょ?』と……

そして柔軟から始まりスクワット、更には腹筋や足上げまで行われた。お陰で腹からつま先まで筋肉痛になってしまった。その次の日

は腕の筋肉痛が取れた頃でしょうと、またしても腕を上げ続けることになる。

その次の日また同じく……といった感じでの5日目。

なんだか腕を包むような不思議な感覚が芽生えかけている時に、ドアを開く音がした。

「……ええつと……どゆこと?」

「あ、ユメ先輩お疲れ様です。」

「!?」

喉が乾いていたからか、とても変な声が出てしまった。ユメ先輩はビックリした顔になっていた……よく考えたらずっとニコニコして顔しか見たことがない気がする。

「——こよみちゃんそのまま。」

「んんッ……あはは。」

まあ何ともホシノちゃんはスパルタなこと……——後2分くらいだし、とりあえず後もう少し頑張ろう。

<side 小鳥遊>

タオルを頭に被り、全身汗だくのままぼーつと立ち続けているこよみちゃんを見て心配そうに私と彼女を交互に見たユメ先輩は、一先ずお疲れ様と一声こよみちゃんに投げ掛けた。

「腕が痛い……」

「成長している証拠。ほら、友情努力勝利が漫画の基本でしょ?」

「どこのバトル漫画なの!?!」

苦笑いを浮かべたユメ先輩に向かってセンパイと泣き付いた彼女はホシノちゃんが酷いんですよ!と声を荒らげた。

プンスコプンスコと頭から煙が出るように怒る彼女は一体何なのかと聞く先輩に人差し指を立てて説明し始めた。

「ホシノちゃんがお弁当を交換してくれないんですよ——!」

「ええ……」

思わず呆れて声が漏れ出てしまう。いや、なんでそこを報告するの  
だろう？普通は結構スパルタ式でトレーニングをすることに  
ついてあーだこーだと言うと思うんだけど。

「……えつと……？」

思わず先輩も聞き返した。もう一度こよみちゃんが詳しく説明を  
するとなるほどといった様子で顎に手を当てた。

「まあ、お弁当ぐらいなら交換してあげてもいいんじゃないかなあ？」  
そう提案をした先輩の横で、さつきまで3ヶ月使った雑巾みたいな  
顔をしていたこよみちゃんは滅茶苦茶いい笑顔でこちらを見ていた。

ため息か、いや、落胆か？それとも諦めか……そんな息しか吐けな  
かった。

「……はあ」

「つへへへ……言質取っちゃった〜♪」

「何がそんなに嬉しいの……」

「だつて〜念願だったもん〜♪」

「……てつきりトレーニングについてかと。」

「ええ!?教えてもらってるのに弱音吐くのはちよつと……ダサいで  
しょ?」

小さく溢した言葉に反応する彼女を見て、ああそう言えばこんな人  
だったな——と納得する。

「……ってホシノちゃん?そんな目で見ないですよ。意外と律儀なのが  
私、雨野こよみの取り柄なんだから。」

「まあ、確かに。」

「でしょ?だからほとんどんキツくしていても——あ、やっぱりお  
手柔らかにオネガイシマス……」

調子に乗った彼女を制すると、掌を返したようにバツが悪い顔にな  
り、先程より謙虚になった。ちよつと調子に乗りやすいのがこよみ  
ちゃんのダメな所だ。

そんなやり取りをニコニコして見ていた先輩はこよみちゃんに  
色々と役立つかもしれないノウハウを教えるらしい。

しかし、結果から言えば先輩は所謂脳筋思考で、片手で銃を扱えれ

ば盾も持てて守りも充実するのだと言った。……いや、それは流石に……

唾然としていたこよみちゃんは何とか参考になりますと答え、先輩は頑張ってねと激励の言葉を送り体育館を立ち去ったのだった。

「まあ、まずは当てれる所から始めようか……」

「……うん。」

ちよつと……どころじゃない脳筋な先輩の一面を知り、何とも言えない空気感の中で練習を再開した。

……先輩の意外な一面を知ることが出来た日だった。



「確かにそうかもしれない。でも、アビドスってホシノちゃんが遊びを断るくらい殆ど何もありませんよ?」

「……………ごめん、もう一度そう考えた理由を教えてください?」

「もー、ホシノちゃんは話を聞かないんだから……………」

「ユメ先輩が部活が言ってたんだ。『私達が卒業する頃には部活は無くなるだろう』って。」

「でもさ、私達も先輩後輩も部活をしないまま青春を終えるのって勿体無いと思うんだ。だから皆で集まって何かをできる部活を作ろうかなって。」

「ああ、なるほどね。」

ぼーっと聞いていたホシノちゃんも私の理由が理解できたみたいだ。

「でもどうするのさ。仮に作ったとしても何をやるの?」

「ふっふーん!その為にこれを作りました!」

「——本……………?」

「そう、これ中はリストがいつぱいあってここにやりたいことを書いていくんだ。こうすれば、過去にどんなことをやったか分かるでしょ?」

「いわばこれは——私達の思い出そのものなんだよ。」

現時点での予定は——

・ 放課後スイーツを食べて回りたい (ホシノちゃん曰く食事中は私がニヤニヤしながら見てくるから行きたくない。)

・ 文化祭を開きたい。(先輩に困った顔をされた。)

・ キヴォトス全校で体育祭 (ホシノちゃんに現実的に無理では?とツッコまれた。ウチだけだと人数少なすぎて盛り上がり欠けるかなと思っただけ……………)

・ 皆でプリクラ撮りたい (先輩も賛成したが、ホシノちゃんは写真が嫌いらしい。)

・ 海に遊びに行きたい (ホシノちゃん曰く夏まで待ってね。のと。と。)

・ 飲食でバイトしてみたい! (先輩が言うにはかろうじて飲食店は

何軒か残ってるらしい。いくつか探してみることに)

・お泊りしてみたい。(私の家はあまり適していない。ホシノちゃんも嫌らしい。)

・ゲームセンターで遊びたい。(ホシノちゃんが駅に3台だけあるドーム状の押し出して景品を取る奴で妥協してほしいと言った。)

……これ、参考にならないんじゃない??

……まあいいか!ホシノちゃんや先輩に案出ししてもらえればいいし、「三人寄ればテーパーテイの知恵」なんて言葉もあるしね!

「これに皆でやりたいことを書くんだよ。」

「……………これは……………」

ホシノちゃんは書かれている内容をじっと見て言葉を漏らした。私がやりたいことを書いても良いと言うが、彼女はそれを断った。

「そっかあ……………いつでも良いからね。」

「……………思い付いたら言うよ。」

「でき、でき、部活申請できるかな?」

「……………承認されると思うけど、人数はどうするの?」

「あ、待って、私は駄目だから。」

「……………ええーっ!?!」

「いやいや何でそんな想定外みたいな……………」

「な、なんで駄目なの?私とホシノちゃんはソウルメイトだと思っただのにっ!」

「や、ソウルメイトって何さ。そんな杯交わした覚え無いよ。」

「そんなあ……………ホシノちゃんがいなくてどうしよう……………」

「ちなみに現時点での候補は誰?私は除いてね。」

「……………んーつと……………ユメ先輩?」

「……………は?どういう人選??!」

「いやあ、これには狙いが……………」

私は指を立てて先輩達を狙った理由を話し始める。

「先輩とホシノちゃんはまとめ役でしょ?いわば猿社会のボス猿みた



いなものだから、そこを押さえれば他の人も入ってくれかなって。後、先輩が部員だったら色々話を通しやすいかなくって……」

「——だ、」

「誰がボス猿だった？」ニブニブニブニブニブ

「ひっ、いや言葉の綾って奴で……」

「……もう怒った！絶対に入らないしそのノートを没収！」

「ああっ！なんて奴だ！」

「何か言った？次からの訓練はハードだからしっかりと柔軟と休養を取る！分かった？分かったなら帰って！」

「うわあん！ホシノちゃんの鬼！悪魔！訓練マニア！」

「(#^ω^)」ビキビキ

脱兎の如く逃げ出した私はそのまま家へと帰った。言われた通り柔軟を入念に行い早めに就寝した——が、

彼女の思惑通り、それでも次の日の訓練で私はぶっ倒れたのだ。た。

超スパルタだよ鬼教官；；

暇を潰せるほどアビドスに娯楽は無い。

「おーい！ホシノちゃん！」

「……なに？」

「いやいや、今日の訓練どうするのさ。」

「……忙しいから自主練でって伝えたでしょ。」

「えー、最近そればかりじゃん。どうしたの？」

「……ちよつと、ユメ先輩と用事があるの。」

「ふーん」

夏休みに入る直前になるとホシノちゃんはあまり練習には来れなくなってしまう。彼女が来れない理由は決まってユメ先輩との“用事”らしい。

私はそう何度も頻繁に用事があるのかと考えたが、先輩は生徒会長だしそういった何か用事が多いのだろうと考える。キヴォトスにおいて“学園”が担うものは地域の自治まで及ぶのだ。この人数が少ないアビドスで砂への対処も含めるとなると相当なものだろう。

「……皮肉にも人がいないから治安は良いのは結果オーライかも」

私はいつも通りの当てに興じている。数ヶ月、日付にして凡そ100日に達するあたりまでこれを繰り返している。何百……何千と繰り返し、遂には方に届き得る中で私はこれをただの“的当て”だと言えるレベルに達していた。

……つまる所免許皆伝だ。

まあ、それでもホシノちゃんの方が私よりも素早く全ての的を撃ち抜いていた。しかも散弾を使って打ち払ったのではなく、スラッグ弾を使用しての記録だった。

正直に言えばあり得ない。一体どうしたらショットガンの暴れを抑えてブレがほとんど無いようにしつつ狙いをしっかりと付けて連射するなんて芸当ができるのか。あんなにも小さいのにあまりにもゴリラすぎるでしょ？

ホシノちゃんと同条件で勝つにはまずブレ抑制と連射を鍛えなければならぬ。今の私は最初の一発のみ完璧に狙った場所へ飛ばせ

れるのだ。……落ち着いていけばの話だけだね。

二発目以降は自分の利き目と利き手側にしつかりと合わせなければいけない。1発目は合わせる猶予があるが、二発目以降は銃身の向きを変えながら合わせるまでに若干のタイムラグが出てしまっている。止まっている的ならばまだしも、動く的ではかなり命中率が落ちてしまう。

「二発だけの早撃ちしかできないのをなんとかしないとね……」

ここいらが限界だ。模擬タイムは16枚の的を撃ち抜くのに28秒、ホシノちゃんは18秒で終わらせた。あつちが装弾数8発で1回のリロード、こつちが6発で2回リロードをしなければいけないとはいえ、1秒に1枚ならばたったの2秒でリロードを終えている。

そんなバカなことがあるかと考えて、もう一度やって貰うとリロードに5秒ほど掛かっていることがわかり、本当は1秒に約1.2発も撃っていた。

ひよつとして、ホシノちゃんは早撃ちならキヴオトス最速なんじゃないか？だつて、こんな馬鹿げた芸当誰もできないだろうから。

（銃の特性っていうものを無視してるよね……もうちよつと力があれば機関銃を持つてる方が強いんじゃないかな。）

「……はーあ、次へのステップが踏めないな。」

撃ち込めるのは6発、たった6発だ。リボルバーの特性として撃ち切る前にリロードするのは非常に手間となる。

だから3回リロードが必要だけど、私はここが一番手間取っていると分析したのだ。

（命中精度を考慮しなければ腰溜めに撃つのが最も早い。だけど……）

腰溜めで撃つのは本当に難しい。というか、劇のように保安官がホルスターから抜いた直後に数発撃つくらいしかさういうシチュエーションで撃たないし、そもそも私の撃ち方は両手でグリップを握ってるし、今どき腰の横にホルスターなんて殆ど使わないし……

私はいつも親指でハンマーを降ろしてから撃っているが、勿論コックキングをせずに撃つことも可能だ。

ただし、そこそこの力が必要な上に指に力が入るため狙いがブレやすい。こればかりは指の筋トレをするしかないだろう。

もう一つの案として、弾薬が込められているシリンダーにピツタリフィットするように作られたスピードローダーを使えばリロードの高速化は実現できる。問題はこの古臭い銃に対応している物を探すにはかなり遠出をしなければいけないこと。もう一つはホシノちゃんから最初は使わないでリロードできるようになったほうが良いと言われていることだ。

まあアナログならアナログを突き詰めるべきという考え方はわかるのだが、何にせよ他のカートリッジ式の銃と比べて1発辺りの装弾時間が3倍くらい遅いのはどうにかしたほうが良いだろう。そもそも装弾数すら劣る場合も多いのだから。

(でも、今更変えてもねえ……)

たった100日、されど100日この銃を握ったのだ。そもそもかつてのガンマンのようなこの銃を見た目と利便性から購入したものなので、どう考えても銃を変える選択肢は出なかった。

この古めかしさにロマンを感じる。古のガンマン達に想いを馳せるのは趣がある。……要するにお気に入りなのだ。

私は訓練所の掃除をした後、中々形にならない改善点を考えながら学園から下校した。ホシノちゃんがいらないのは非常に残念だけど、私は久々に駅前遊びに行こうと決めたのだった。

## 夏休み——キャンプはできない地域

——アビドスの夏は暑い。

照る日は地面の砂を熱している。陽炎がゆらゆらとどこまでも揺れる。この世はまるでトルコ・コーヒーのような様相である。

無論、夜は遮蔽物の側でないと死ぬほど風と砂が襲いかかる。寒い上に明かりもほほ無いで危険が伴うのだ。

しかしそんな場所でも一人。もの好きが居た。

理論上1週間は生き延びれる水と食料を用意して望んだキャンプだが、早々に帰りたかった。

木漏れ日で休息？ここでそんなに茂った木は恐らく幻覚の類の可能性が高い。でもそんな過酷な場所こそキャンプをしたくなるものだ。

……………暑い。

「……………来るんじゃない。でも家は冷房が壊れたんだよなあ。」

こよみの家には冷房が設置されていた。通常の室外機ではアビドスだと砂をまき散らす可能性が高い為、古い型をサルベージして使う訳にはいかなかった。なので所謂業務用のエアコン——筒のようなものが生えているアレを拾ってきて使っていた。

しかし、やはり経年劣化が酷い。去年の夏くらいから冷房の効きが弱く感じていたが、冬の大砂嵐で倉庫が一つ砂だらけになった時に逝ってしまったのだろう。南無。

そもそも何故一人で過酷なキャンプをしているのだろうか。

私は当然の疑問を浮かべながら目を閉じたのだった——

### <夏休み七日目>

「はあ……………あつつい……………」

汗がでろでろに出てくる。それを対処する為にタオルを常に巻いて湧き出る汗を拭き取っている。一応室内なので可能な限りラフな格好だ。これも全部冷房が壊れてしまったせいなのである。

「風も無いし気温は高いし雨も降らないし……………なんでだよ！」

自然の厳しさに苛立った私は大声を出して発散する。汗だくな上、水の確保が大変ということで水浴びも1日一回に制限しており、それはもうべっしやべしやな状態で1日を過ごしているのだ。あらゆる面で年頃の乙女とはいえない格好で倒れている。ただ一つ、この暑さが功を奏しているのは汗を吸ったタオルがすぐに乾くくらいか。

連日の日照りに家庭菜園も全部ダメになったし……

いつそのこと、夏の間は避暑地にでも行こうかと考えたものの費用を捻出することはできなかった。そもそも、この家も手入れしなければすぐボロボロになってしまう。そんなに遠いところには行けないし、夏の間何も管理しなければ即座にここを離れて別の住居で過ごすなければならなくなるだろう。

人間的な生活をする為に、まずはエアコンを修理するのが先決だ。幸いにも簡単な修理は調べれば誰だつてできる。一応使わないだろうが電子工作キットは一通り揃っているのだ。

僅かな望みに賭けて分解し、中身を確認したがいいもの……

まあ、なんとというか、所謂スポットクーラーというものは急激に冷やされることで空気中の水分が結露してしまいタンクに貯められるのだが、小さな砂粒によってその辺りの部品がボロボロになっていたり、そもそも冷却装置が壊れていたりしていた。そもそも砂の中から引っ張り出して使っているものなので劣化しているのは当たり前なのだが……こればかりは直せないと、どうにか部品のみ注文でなんとかできないか考えた。だって、これは数年前に新品で買うと数十万もするハイモデルなのだ。

私にはそこまで払える金はないので同じものを買えないが……あまりにもこれは”効き”が良かったのだ。可能ならば同じものを使いたい。

なので調べ回って部品のみを安く買うことに成功したが……その間まではどうしようもない。駅の方面に行けばコンビニなどもある為涼めはするものの、アビドスでは日が昇らない時間帯はかなり冷えることもあるので注意が必要だった。というか、そう何日も暇を潰せない。

じゃあ何をして暇を潰せばいいのかと言えば、アレしかない。キャンプだ。

え？砂漠でキャンプを!?

——できらあつ!

……まあ、無謀かもしれないが面白そうだと思う。ちようど砂漠でサバイバルする人の動画を見たのだ。

(そもそもほぼ自給自足してる時点で私の生活もキャンプみたいなもんで……)

なんて疑問が浮かんだが、汗とともに流れていった。

(結局、やる事が無くてキャンプしてるけど……そろそろキツイ……)

キャンプ生活は3日目、予想以上の暑さで日中はほぼほぼダウンしてるので夜間に行動するようになってる。これじゃまるで猛獣の類だ。そして夜間は暗すぎてライトがないと何も調達できないし……

砂漠と化したこの辺りでは鳥も住まず、植物も無く、昆虫もほぼほぼ死んでる。

他所からの持ち込みか何かで元々いない昆虫や生き物が住んでいることもあるが、劣悪な環境下ではまともに見ることは不可能だ。まばらに発見したとしてもそれは腹の足しにすらならない。

やはり、一度生態系が死に絶えた後では反映するまで時間がかかるのだろう。厳密には死に絶えてはいないのだろうが、やはりゴーストタウンと化した住宅街の方があらゆる生き物が探しやすいのだ。

(そこらの虫は美味しくない。そもそもビジュアルからして気持ち悪いのに食べる部分も少なく、焼くより揚げた方が安全だが貴重な油を数匹に対して使えないので全てにおいて悪い部分が目立っている。)

イモムシや大型の昆虫であれば多少は味が良くなるが、やはり家畜には勝てない。そもそも私みたいな健康な少女の食事を賄いきれない。

でも軒下に蜂の巣などがあればたまにハチミツを取ったりする。

今では、その昔にハチミツがなぜ高級品だったのか十分に理解できる。そりゃあ自給自足すればあの甘味が究極の嗜好品となるのも頷ける。

他にも鳥やうずらなどを飼うことも考えたが、飼料として使えるものがあまりにも少ない。私では管理しきれないほどに大きくしなければ安定した供給は難しいだろう。

なので砂よけを設置するだけかつ少しの手入れで済む痩せた土地に強い植物を育てているのだ。正直に言えば腹の足しにはなっていないが……まあ、趣味を持つのは良いことだ。

折角持ってきた食料も日陰に置かなければ暑さで腐りかねない。夏のアビドスにおいて、室外で保存という概念はありえない。というか暑さ関係なく砂まみれになってしまうのだが。

(……持って来るのを4日にしとけばよかった。)  
何より、現在最も危惧すべき物は水だ。蒸発しないようにはしているが……どうしても荷物の大部分のウェイトを占めてしまう。

そもそも移動に徒歩6時間も掛けて歩いたので、もう何がなんだか……いや、これホントになんでこんな砂漠のど真ん中にいるんだろう……？

(………とりあえず、30分おきに水を飲まないとダメだ。)

幸運なことに砂嵐には襲われていない。もしも襲われてしまうとどこかへ吹っ飛ばされて餓死するだろうが、数年くらい砂漠で過していれば前兆に気付いて逃げるくらいは問題なくできる。

食料も無理やり詰め込んで栄養不足にならないようにしている。最低限は食べないと生きていけないからね。

水だつて常に汗が出てるので飲まないとダメだ。しかし一度に吸収できるのは僅かなので定期的に一定量だけ飲まないといけない。

……ふふ、過酷な状況だけど、1ヶ月廃墟街サイバルした時よりかは致命的な要素がない。あの時は食料も水も無かったからなあ……

なんて思っていた束の間。



「——この暑さは堪えるな……」

キツイ。日差しがあまりにもキツイのだ。

家では私は結構裸族なのだが、ここではそんなこともできる筈がなく、今は薄い布を重ねて直射日光と日焼けの対策にしている。

それでも暑すぎるが。

いや、それよりも蒸れるのだ。

流石に3日風呂に入っていないと絶望してしまうくらいニオイ始めた。すごく臭い……

「きよ、極限……」

……移動しづらいし、靴に砂が貯まるし、その他諸々を考えてもあまりにも砂漠というものが人——いや、生物の過ごす環境じゃない。

燦々と太陽がこちらを向いている。よくお天道様がなんていうが、ぶっちゃけこっちに向いてほしくない。春先でさえ暑いというのに夏場なんてもう終わりだよこの国。

(そら人も居なくなるわな……)

アビドス自体、元々暑い気候だった。学園都市キヴオトスはかなり広大な範囲の領土を持っているが、年中雪ばかりのレッドウインターなんて場所の真反対に位置するのがこのアビドスである。

砂漠化が進んでからは、もう石焼き芋の如く砂があっつあっつになり、上を歩く人間に襲いかかる。通常の乗り物は砂まみれでメンテナンスをしなければいけないし、バスや電車はもう既にアビドス専用の装備をしているせいで料金も運行数も少ないのだ。

交通機関が廃れるということは、既に人がいなくなったということの意味する。後はこれの繰り返しでアビドスは今の状態になったという。

(……私は、どうなるんだろう。)

夢はこの砂漠のように何も無い。

何か出来る訳でもない。

その日暮らしの生活を続けるのか、それとも今のようになんか自給自足を続けてるのだろうか。

いつもキャンプをしていると、ふとそうした考えが浮かんでくるのだ。

誰とも話さず文字としか会話をしない日々が暫く無かったから、ここ半年ほどはこの問題とは向き合うことは無かった。

でもまあ……アビドスに通ってからは何だろうか、心が充実したっていうか。とてもキラキラしたものの中に包まれたんだよね。言語化は難しいんだけど……うーん。

(……) 心の拠り所” って言うべきかな。やっぱり孤独は駄目だよね。)

私は人一倍孤独に対して強いと自負している。例え2年、3年も一人だったとしても問題なく生活できるだろう。

でも、そんなのはもう嫌だ。先生はいないけど、友達がいって、先輩がいて、後半年すれば後輩だってできるかもしれないんだ。人間って社会性を大事にする生き物だから尚更だ。

………ホシノちゃんと遊びたかったなあ……

「……あれ？」

何か、チラリと動いたのが目の端に映る。

それは奇跡か、

——彼女だ。

偶然か、

——ホシノちゃんだ。

必然なのか、

——ユメ先輩だっている。

だが、それはどうしようもなく、”ある”事に違和感を覚えた。

「……え？」

私は目を疑った。

いや、バカな。真夏のアビドスで、陽射しの元で、そんな——

(……幻覚、だ。)

私は暑さでまともじゃなくなったらしい。

水着を着た彼女達がここで何かをしている筈がないのだから。

私は死んでしまう前に荷物の殆どを放棄して病院へと向かう準備をしたのだった。

## 物語の始まりは――

「……や、ホシノちゃんー!」

――結局、ホシノちゃんを夏休み中に遊びには誘えなかった。

こうして会うのも実に久しぶりだ。私はあのキャンプのせいで少し焼けてしまったので、少々変わったように思われるかもしれない。

「……………」

(あ、あれ?)

ホシノちゃんは少し怪訝な目をしてこちらを見て、じっと黙っている。

「夏休みどうだった?」

「……………」

(ええと……反応が無いんだけど……)

「私は冷房が壊れてさ。いっそのこと外でキャンプでもしようと思つて――」

「……楽しそうだね。」

「ああ、うん。楽しく……いや、楽しくなかったかも。砂漠でキャンプをしたんだけど、やっぱり無理だったよ。」

「……………」

「……あ、はは……えっと、ちよつとお手洗いに行つてくるね。」

――何か、ホシノちゃんの様子がヘンだ。なんというべきか『余裕』がない。あと、苛立ちのようなものを感じる。

……何か気に障るようなことをしただろうか。行動を振り返るが、特に目立ったようなことを下覚えがない。

(――そういえば、ホシノちゃんって先輩の手伝いをしていたんだっけ。)

砂の問題を解決する為にユメ先輩は日々奔走しているのだとか。その手伝いをしているホシノちゃんは夏休みは忙しかったのだろう。……うーむ、何かジュースでも買ってあげたほうが良いのかもしれない。

いやしかし、ここは私も手伝うべきではなからうか？

だって、仮にも自分が所属する学園のことだ。賑やかになって、後輩もいっぱいできたら嬉しいし。何よりみんなとの共同作業だからね。

さっきの様子からして、ホシノちゃんに話をするのは良くないような気がする。ユメ先輩なら相談できるかもしれないし、先輩を探そう。

校舎を歩いていると運良く生徒会室前で立っている先輩を見掛けた。

「あつ、ユメ先輩！お久しぶりです！」

「こよみちゃん、元気にしてた？」

「はい、夏休みはそれなりに満喫しましたよ！それで、ちよつと話したいことがあつて……」

私が暗に時間に問題ないかと聞いてみる。先輩は少しだけ表情を変えて、今はちよつと駄目だと言った。

後で時間を取るからと言っていたがそこまで時間を取るようなことでもないのです、また今度話します。と言って先輩が生徒会室へと入って行くのを見届けた。

——結局この日は何も無く、ただ一日が過ぎていった。

帰り際に見た夕日がキレイだったことが、唯一覚えていたことだった。

次の日、先輩は休みだった。

ホシノちゃんは変わりなく。

他の人も休みだった。

次の日も、その次の日も、赤い日が落ちる。揺れる光に当てられて私はあの日言わなかったことを永遠に後悔するだろう。

襟を掴まれ、尻餅を付かされる。目に映る顔は怒りに満ちたソレ

で、私が最も知らない彼女の顔だった。

——巫山戯るな、とぶつけられる。

全てを吐き出し切った後の、最大限の侮蔑を含んだ最後の言葉だった。

彼女の言葉を理解できない。何故、が私の頭を支配する。

——ユメ先輩は私を庇った。

何故か。

——普通の学園生活を送ってほしいから。

何故か。

——アビドス学園では出来ないから。

何故か。

——アビドス学園には億を超える借金を抱えていたから。

日が暮れて、ホシノちゃんが言ったこと、握らされた紙は転学届だったことを理解した。彼女があそこまで怒りを露わにしたのは先輩を見殺しにしたからだ。彼女にとって、苦楽を共にした先輩だから………

帳が落ちる。今日ばかりは藍ではなく、黒く塗り潰された空が嘶いた。空が割れ、風が吹き、砂が舞う。それは私の心模様のようにであった。

グルグルと想いと思いが廻り交ざる。

絵の具を混ぜたことはあるだろうか？色の三原色といって、赤・青・黄を混ぜると全ての色を作ることが出来るのだ。しかし、当然、様々な色を混ぜれば暗く重い色となる。

——鈍色——が、私の心を染め上げた。

明るくなる、夜が明けた。しかし眼下は白黒で、果てしなく広い砂の平原。あの子はきつとこの向こうへ行ったのだ。

嵐は去り、世は再び平穏を取り戻した。

思い出すのは彼女の言葉。

——億を超える借金が残っている。

ならば、ならば、私が今できることは……

これを返すしかない。無論完済はできないが、少しばかりは返すことが出来るだろう。それが償いになるのなら……